

世俗性の弱いタイ社会において、 宗教研究はいかなる形でなされているのか

矢野秀武

【要旨】 本稿は第1に「タイにおける宗教研究の歴史と現状」に関する調査の中間報告を行ない、第2にこの調査の目的、背景、展望について、方法論的な観点からいくつかの問題を論じている。この調査の当面の課題は、現代のタイ人宗教研究者のうち、アカデミズムの中で中心的な立場にある人物を選定し、その研究内容を把握することにある。さらにこれに基づき、一方でタイ人による宗教研究の基礎情報の収集と公表を行ない、他方でタイにおける国家と宗教と宗教研究の関わりを明らかにすることを目的としている。このような目的の背後には、タイ社会のような世俗性（世俗主義と世俗化）が弱い社会における宗教と宗教研究の特色を理解する必要性、ならびにタイの宗教研究についてみられるタイと外国（特に日本）の志向性の違いを自覚する必要性への認識がある。またこの研究の展望として、タイの事例との比較を通じ、世俗性の強い日本社会における宗教研究の、自明だがあまり触れられないことのない特質について指摘する。

1、現地のアカデミズムと宗教⁽¹⁾

日本における東南アジアに関する研究（特に宗教研究）は、日本や東アジアの研究と比べると圧倒的にマイナーな領域と言えよう。それでもこの分野の研究は、第二次世界大戦後に急速に増加し、またその対象も多岐にわたり、内容的にも深まってきた。中でもインドネシア、タイ、マレーシアに関する研究は、比較的多くの研究が蓄積されてきた。現在、日本における東南アジア11か国の研究において学会組織をもっているのは、おそらくこの3つの国だけであろう⁽²⁾。その背景には、かつて東南アジアの他の

国々においては激しい内戦が行われていたり、厳しい国内統制が敷かれていたりしたため調査が難しかったこと、タイやインドネシアなどが日本の経済戦略や冷戦時アメリカの軍事戦略にとって重要な国であったことなども関係していると思われる⁽³⁾。ただし近年は状況がだいぶ様変わりし、東南アジアの他の国々の研究も盛んとなっている。

その一方、東南アジアの現地研究者の研究内容について十分な知識が備わっているかと言えば、必ずしもそうではない研究領域が少なくない。もちろんかつてと比べ情報通信環境が進展し、飛行機での移動も安価になったため、現地研究者との交流も増えている⁽⁴⁾。しかし、少なくともタイの宗教研究全般としては、まだまだ交流も少なく、現地の宗教研究の全体像の概要把握さえできていない。

つまり現地調査を行ないタイの宗教に詳しい日本人研究者が増えてきたにも関わらず、タイ国内で諸宗教の何がどう論じられてきたのかが十分に理解されていないのである。自分の限定的な専門分野に関しては、カウンターパートとして、あるいは指導教員として、現地研究者と密なつながりを持っている日本人研究者は多い。しかしタイのアカデミズムが全体的に、宗教関連事象にどのように関わり、いかなるものを見方を提示してきたのかを十分理解することなく、いわば、現地のタイ人研究者の頭越しに、日本人研究者が現地調査を行うというケースがあることも否めないだろう。とりわけ自分自身がそうであった。

以下、本稿では、このようなタイ現地の宗教研究の現状について論じる。いわばタイ宗教研究についてのフィールド調査研究、あるいは宗教研究の比較宗教学といった試みである。この研究は駒澤大学の在外研究制度を活用し、2017年4月から2018年3月までの1年間、タイで行なった調査の一部である。ただし調査はまだ途中段階であることなどもあり、本稿では中間報告として、調査の方法とこれまでの成果を提示するととどめている（本稿第2節）。ただし本稿の中心となる議論は、そのあとの部分（第

3節、第4節)における、タイを事例とした世俗性の弱い社会における宗教研究の特質と可能性、そしてそこから逆照射される日本の宗教研究の、自明だがあまり注目されない前提を、明らかにする試みにある。

2、調査研究の方針・計画・方法および暫定的な成果

2-1 方針・計画・方法

タイにおける宗教研究の現状の把握を行なうにあたり、本研究では、次のような調査の方針を立てて情報収集を行なってきた。つまり、「現代のタイ人宗教研究者のうち、アカデミズムの中で中心的な立場にある人物を選定し、その研究内容を把握する」という方針である。加えて、次世代を担うと思われる若手研究者についての情報も収集している。なおタイ在住のタイ人以外の研究者は、その中に世界的に有名な研究者も少くないとは言え、今回の情報収集の対象には加えていない⁽⁵⁾。

このような方針を立てた理由は、これら指導的な研究者の研究に注目することが、タイの宗教研究における最良の成果や特質を把握することにつながるという点、ならびに他国の研究者がそういった成果を目にし、自国での宗教研究との接点を模索しやすくなる点、またこれら指導的研究者との交流を持ちやすくなるといった点があげられる。

この方針に即し、指導的な研究者のリストアップ、これら研究者へのインタビューおよび主要業績の収集と研究内容の確認という形で調査を進めてきた。インタビューでは、主要著作、自身の研究の特色、博士課程時の研究と指導教官、学問的影響を受けた研究者、タイにおける宗教研究(特に自信の専門領域)についての見解、指導的な宗教研究者や気鋭の若手研究者として推薦したい人物などを質問している。その後、リストに修正を加え、最終的には40名程度の研究者を選出し、彼らの研究の特色や主要著作、タイの宗教研究についての見解などをまとめる計画である。まずは日本語で執筆し、その後英語版も作成できればと考えている。

このような一連の調査研究を進めるにあたり、調査は、まず著名な宗教研究者の暫定リストの作成から始めた。しかし、タイでは各研究分野の国際会議が比較的頻繁に開催されるものの、宗教研究に特化した学会組織は存在しない（宗教別の学会組織もない）。唯一2001年設立した（前身の研究会は1977年発足）「タイ哲学宗教学会（Philosophy and Religion Society of Thailand）」が、宗教に関する学会と言えるが、哲学と合同での学会となっている [タイ哲学宗教学会ウェブサイト]⁽⁶⁾。そこで、手始めにこの学会のウェブサイトに記載されていた発足時から現在までの役職者リストを参照し、その中から宗教研究者、現職の研究者、2回以上役職を担っている人物という条件で、中心的な研究者を絞り込んだ。

ついで、宗教研究関連の学科を持つ大学を探し、そこで宗教研究に携わる教員をリストアップし、著作の比較的多い研究者を抽出した。またイスラーム・ムスリム研究の研究者については、情報が限られていたため、新聞や雑誌の記事などを参考に、著名な研究者を選出した。

上記のように3方向からのリストアップを行い、それらを総合したものが、著名な研究者のリストの最初のたたき台となった。しかしこの段階では、タイのアカデミズムの状況に疎い私の判断だけでリストアップをしているので、当事者であるタイ人研究者からの意見をここに加えてリストの修正を行う必要があった。

そこで次に行ったのが、知り合いの宗教研究者数名に試験的なインタビューを行なうことであった。この試験的インタビューによって、リストの修正、後に行うインタビュー時の設問の調整などを行なった。その後、本格的なインタビュー調査を開始した。インタビューは宗教研究の概要がとらえやすいように、多様な分野からインタビュー対象者を選ぶように心がけた。それぞれ約1時間のインタビューをタイ語で行なった。この過程で、リストアップした指導的研究者についての意見を伺い、さらなる修正を加えていった。基本的には、2名以上の研究者が、重要な研究者だと指

適した研究者をリストに残し、それ以外の研究者をリストから外すようにした。

なおタイの大学の教員へのインタビューは、なかなか時間の都合をつけていただくことが難しく、思いのほか時間がかかっている。そのためリストアップされた40名程度全員へのインタビューは、時間的に困難と判断し、分野などを考慮して15～20名程度のインタビュー対象者を選定している。現在（2018年10月）までに、14名のインタビューを終えている。

2-2 暫定的な成果 タイの宗教研究の特質

上記のような手続きで研究を進めているため、最終的リストに残る研究者名はまだ確定していない。実際、現段階の研究者名リストは、最初のたたき台のリストから半数以上が入れ替わったものである。したがって、リストに残ることが確定している一部の人物を除き、他の研究者の氏名や研究内容等を明示する事は控えておきたい。以下、全体の傾向やインタビューの中で見えてきた論点を、いくつか簡単に述べておく。

今までのところ、リストに残っている研究者の主たる研究分野は、次のようになっている（若手研究者は除く）。

上座仏教思想（9名）、大乘仏教思想（3名）、ヒンドゥー思想と宗教（1名）、中国思想と宗教（1名）、西洋思想と宗教（1名）、イスラーム・ムスリム研究（11名）、キリスト教（2名）、宗教人類学（2名）、社会科学系の宗教研究（9名）。

研究方法の点からみると、全体として思想研究が多い。研究対象別では仏教研究が最も多く、次いでイスラーム・ムスリム研究が多い。ただし後者については、タイ南部での紛争問題を取り上げたものも多く、長らく解決しないこの問題が、研究者数の多さに一定程度影響しているとみられる。また、宗教人類学や社会科学系の宗教研究も、そのほとんどが上座仏教を研究対象としており、加えてヒンドゥー思想、中国思想、西洋思想の

諸研究も、タイの上座仏教との比較を行なうケースもあるので、広い意味での上座仏教研究に含まれる研究者はかなり多くなる。

リストの研究者の所属を見てみると、研究者養成志向を持つ一般の国立大学（主として僧侶向けの教育を行なう仏教大学はここに含まれない）、および一部のキリスト教系私立大学に偏っており、特にバンコクとその近郊に所属大学が集中している。ただしタイ北部にあるチェンマイ大学の所属も少なくない。また、多くの研究者が、欧米の大学での留学経験を持ち、現地で博士の学位を取得している。仏教学については、インドの大学へ留学した研究者も若干ながら見られる。

また、インタビュー時に他のインタビュー対象者の推薦をお願いしてきたが、宗教別の研究者ネットワークが強く、他宗教の研究を行なっている研究者を紹介されることが少なかった。具体的には、仏教研究者からイスラーム・ムスリム研究の研究者やキリスト教の研究者を紹介されることが非常に少なかった。対象とする宗教別に研究者間のつながりがやや閉じているということかもしれない。ただしそのようなつながりがまったくないわけではないし、質問の仕方によっては聞き出せた可能性もある。とはいえ、宗教研究の学会が少なく、宗教横断的な研究の場が限られているためか（そもそも宗教別の学会組織もないのだが）、筆者の感覚では日本の宗教研究アカデミズム内のつながりと比べ、他宗教研究者とのつながりが弱いように感じている。

この分断傾向は、思想面の宗教研究と社会学・人類学的なフィールド重視の宗教研究との間にもみられる。特にそれは、仏教研究の場合に大きいようだ。そして、仏教とりわけ上座仏教研究に関しては、思想研究者が多くの割合を占め、社会学・人類学的なフィールド研究に基づく上座仏教研究を行なっている研究者は非常に少ない。

インタビューを通じて見えてきた論点としては、以下のようなものがあげられる。まずは、インタビューした研究者の多くが、タイの宗教研究ア

カデミズム全体における批判精神の欠如を問題視している点である。それは継続的な調査研究や先行研究の乗り越えなどがあまり行われず、その時々社会的に注目されたテーマについてそれぞれの論者が意見を述べて終わりになる傾向についての論評である。逆に言えば、筆者の調査研究におけるリストに載るような指導的な研究者は、そのような批判精神を持った継続的な研究、一定の視点からの分析や解釈を深める試みを行ってきたというわけであろう。

また今回の調査のリストに、仏教大学所属の研究者がほとんど見られないことも気になる点である。これはつまり、タイ国サンガ自体が国による公設団体であり、そこに所属する僧侶という立場で、サンガや仏教（上座仏教）に関する批判的な議論は行ないにくいということが要因かもしれない。とりわけ師や年長者へ説への批判は行ないにくいだろう。ただし、仏教大学での研究の傾向や研究の社会的環境について確かなことを述べるためには別途調査が必要である。

一方で、批判的議論を展開している研究者においても、規範的な宗教思想研究が重視される傾向が見て取れる。しかしそれはやみくもに現状維持を求める規範性ではなく、解釈の多様性や他宗教思想との有意義な接点などを模索する意味での規範的な思想研究である。例えば、解放の神学の考えをタイ仏教思想に応用するタウィーワット・ブンタリクウィワットの研究 [タウィーワット 2001]、仏典結集の歴史を社会思想的な側面から解釈して現代タイ国サンガの自律の可能性をさぐるチャーナロン・ブンヌンの研究 [チャーナロン 2004]、あるいはタイ国サンガの固定化した解釈に対抗し聖典の多様な解釈の在り方を提示するスワンナー・サターアンの研究などがある [Suwanna 2013]。これらは、宗教・仏教を社会規範のベースに据えたタイ社会の現状への批判につながり、タイ国サンガの権威の在り方へ再考を迫るというものである。この点については、本稿第4節でも若干触れるが、詳細に関しては稿を改めて論じたい。

また、この批判的議論に関わるものの、比較的若い世代の研究者によって、新たな宗教論がここ5年くらいの間に見られるようになった。それは世俗主義・政教分離を明確に主張する宗教研究である。スラポット・タウィーサック [スラポット 2018]、ウィチャック・パーニット [ウィチャック 2015] らの研究は、この点を強調している。それは前の世代の研究者（批判的議論を行ってきた研究者を含む）には見られない傾向であり、タイの少数派宗教者の立場を踏まえた議論としてもあまりなされてこなかったものである。もちろん問題の生じた現場において、宗教的少数者（場合によっては多数派）が異議申し立てをすることは少なくないが、研究としてこの問題を原理的に問い、制度変革に言及するという事は、これまでほとんど見られなかった。なぜ世俗主義・政教分離あるいは信教の自由の議論がタイにおいてあまりなされてこなかったのか、それがなぜ今論じられ始めているのか、この点についても、今後の調査研究が必要である。

3、調査研究の目的・背景（問い）

以上述べてきたことが、この研究の概要である。またこの研究の意義については、本稿の冒頭で少しばかり述べているが、実際にはその他にもいくつか述べておくべき事がある。この点について、以下、本調査研究の目的・背景（問い）・その展望の3つに分けて、やや詳細に論じてみたい（第3節で目的と背景、第4節で展望について論じる）。なぜなら、この研究の背景や展望を明確にすること自体が、タイの宗教や宗教研究を捉えるある種の視座を提示することになり、さらには日本人によるタイ宗教研究、そして日本における宗教研究の前提条件などをも反省的に捉える視座を提供しうると考えているからである。そういった方法論的問題を掘り下げたことを念頭に置きながら、本調査の目的と背景（問い）・展望を述べてみたい。

3-1 調査研究の目的

本研究調査は、多面的な目的ないしは効果を想定している。その1つは研究の人的つながり形成のための基礎情報の収集である。本研究のようなタイの宗教研究の概要を捉える試みは管見の限りは見当たらない。また、これはタイ人研究者にとっても有益な資料となるだろう。加えて、日本人（英訳した場合にはその他の外国人）にとっては、国際学術会議の登壇者として招待者の選定や、タイの宗教を研究する若手研究者の研究を支援する基礎情報ともなるだろう。

もう1つの目的は、そしてこちらが筆者の研究活動上は主要なものとなるのだが、研究考察のための基礎情報を収集するというものである。とりわけタイのように世俗主義・世俗化の弱い社会における、近代以降の宗教・国家・宗教研究の連関はいかなるものなのかについて考察を行なうための基礎資料となる。このような国の宗教・国家・宗教研究の連関に関する研究は、近現代の欧米の国々（必ずしも世俗主義・世俗化の在り方は一様ではないが）や日本のような国々の状況を前提にした宗教研究を相対化する可能性を秘めている（本稿第3、第4節を参照）。

3-2 調査研究の背景（問い）

このような目的を設定した背景にはいくつかの問いがあった。1つは、タイ政教関係研究における筆者自身の継続的な問い（拙著『国家と仏教 タイの政教関係』において掲げていた問い）であり、もう1つは、筆者のような日本に拠点を置く研究者が、日本語で（つまり日本社会に向けて）、タイの宗教研究を行なうことに伴う問いである。まずは前者からやや詳しく説明していく。

3-2a タイの政教関係についてのさらなる問い

拙著『国家と仏教 タイの政教関係』[矢野 2017] は、近代国家である

が、世俗主義国家とは言い難いタイの（王室と仏教を基盤とする）政教関係をどう理解するか、特に統治の宗教理念は、どのような言説・制度によって具体化され、国民に身体化されてきたのか、について論じたものである。そのような問いを掲げたのは、現在のタイの政教関係の問題を批判的に考察するにしても、仏教の理念からの批判や、民衆による日常的な宗教実践の多様性へ注目した批判だけではなく、国家によって縦横に張り巡らされた制度やそれを支える言説の在り方全体を考慮に入れた考察が必要だと感じたためであった。仮に変革が必要だとしても、そのような制度・言説の網の目をどこからどのようにずらしていくのかといった、具体的な戦略を立てられないようでは、適切な代替案さえ出せないだろう。それはタイという国の変革というだけではなく、似たような体制を持つ国々のケースの考察、さらにかつて似たような体制にあった国々の過去を理解するためにも必要な作業だと筆者は考えている。

そしてそういった問いの延長線上に、次のような2つの問い（およびそこから派生的な問い）が生まれてきた。第1に、宗教が公的なものとしての特性を持ち、西洋的な宗教学がほぼ不在のタイでは、国家（体制）が宗教研究にどのような影響を及ぼすのかという問いである。もっとも、宗教学が弱くても、仏教学の影響力は大きい。したがって、世俗主義・世俗化が弱く、上座仏教を重視する社会において、いったいどのような仏教学がなされるのかという点も、さらに問われるべき課題と言えよう。また、この問題ともおそらく連動すると思われるのだが、タイでは「タイ宗教史」が書かれたことがないのはなぜなのかといった派生的な問いが挙げられる（少なくとも管見の限りでは見られないし、私の知り合いである数名のタイ人研究者もこの点に同意している）。宗教を公的なものとして位置づけながら、タイ仏教史、タイのキリスト教史などの宗教別の歴史しか描けない、つまり宗教一般を平等に扱うナショナルヒストリー形成が困難である状況とはいかなるものなのか。どのような近代の重力場の中で、タイ

の宗教や宗教研究は生成してきたのかと言った問いである。

次にもう1つの問い（拙著の延長上の問いの2つめ）を取り上げる。これは、政教分離や信教の自由があまり問われない（問いにくい、問うても無視される）思考・制度空間とはどのようなものなのかといった問いである。タイにおける少数派の宗教から、サンガと上座仏教を重視するタイ国家の現状に対する異議申し立ては、あまり見えてこない。小さな異議申し立ては少なくないが、制度全体の問題性を問いかけるようなものはほとんど見られない。宗教的な抵抗の物語は（北タイの僧侶クルーパー・シウィチャイヤ、ムスリムの指導者ハッジ・スロンなど）ごく一部を除いて広く共有されることはない。そういった視点からの研究も少ない。もちろん民族・宗教・国王を中心とした国家体制を批判する事は、政治的に危険な行為であるからと言えるかもしれない。しかしそれだけにとどまらず、そもそもそういった抵抗が思考され得ないような、見えない制限があるようにも思える。

タイの宗教研究者において、これまで政治と仏教（もしくはキリスト教、イスラーム）などに関する議論の積み重ねはあるが、世俗主義・政教分離・信教の自由といった点を重視する議論は少ない。欧米の大学で博士号を取得し、リベラルな立場にいるタイ人研究者の間でも、政教分離や信教の自由についての議論が少ない。間接的な事例であるが、タイでトップクラスの国立大学であるチュラーロンコーン大学の図書館検索では、secularismで検索をかけても、タイ語の書籍は1冊もヒットしない⁽⁷⁾。secularismのタイ語訳の用語で検索しても事情は同じである。しかし先述のように近年、世俗主義・政教分離を明確に主張する議論が見られるようになった、その変化は何を意味しているのかも問うべき課題である。ちなみに、世俗主義を主張するスラポットのタイ語書籍は、図書分類では仏教・政治のサブジェクト・カテゴリーに入っており、それに即してキー

ワード検索でヒットするようになっている。

3-2b 日本のタイ宗教研究に関する問い

次に、本稿の調査研究を行なう背景（問い）の2つめについて述べる。この背景（問い）とは、日本に拠点を置く研究者が、日本語で（つまり日本社会に向けて）、タイの宗教研究を行なうことに伴う問題や問いである。この点についても、2つに分けて論じたい。

1つめは、タイの地元の宗教研究者（タイ人研究者）の研究状況がよく理解されていないという問題である。あるいはそこでどのような研究がなされてきたのかといった問いである。実際、筆者はこれまで自身の研究で、タイの宗教研究者や宗教研究の全体像、現地の研究文脈をほとんど理解せずに研究してきた。とはいえ、他の日本人研究者に聞いても、おそらくこの点について詳しい方はそれほどいなかったのではないだろうか。

このことを日本の宗教研究に当てはめて考えれば、その問題性が理解しやすいかもしれない。つまり、日本の宗教研究をする外国人研究者が、日本社会で宗教がどう論じられてきたのか、宗教研究で著名な日本人研究者は誰で、彼らがどのような議論をどのような文脈で行なってきたのかといった点を十分に踏まえずに、日本で調査を行い、本国向けに研究者の母語で論考を執筆するといった事態である⁽⁸⁾。

この問題は、文化人類学の領域では、ネイティブ人類学や学問的植民地主義の問題として長年議論されてきた [桑山敬己 2008]。つまり人類学における描く側（中心）と描かれる側（周辺）の学問的対等性の問題や、ネイティブ研究者の業績を無視や軽視する傾向の問題である [桑山2008：21, 44, 71]。ただしこの問題は、非ネイティブの研究者のとりわけ人類学の学問的中心地域である欧米の側の視点や優越性だけに起因するものではなく、ネイティブ研究者の人類学研究に見られる文化ナショナリズムの傾向といった点とも関わる [桑山2008：22, 35, 92]。

いくつかの例外もあるが⁽⁹⁾、タイ人による宗教研究が、日本のタイ宗教研究であまり注目されてこなかった理由として、どのようなものが考えられるだろうか。まず1つ言えるのは、タイと日本のケースでは、学問的な周辺と周辺との関係の問題になるという点である。英語を介在しない限り、タイ語の研究と日本語の研究を相互に参照できる研究者の数は、限られてしまう。むしろ英語によるタイの宗教研究という中心からの影響圏に、タイ語によるネイティブの研究と、日本語による研究が飛び地的に存在しているという状況で、この飛び地同士を直接結び付けるには、それなりの工夫が必要となるだろう。

もう1つ言えることは、日本とタイの宗教研究の志向性の違いが、双方における意識のずれや無関心を生み出してしまっているという事である。現在の日本人によるタイ宗教研究は、思想研究よりも現地の宗教実践を重視するフィールド調査研究の傾向が強い。他方で、タイ人の宗教研究者は、思想研究に重きを置く傾向がある。そのため相互参照されることが少なくなってしまうのである。

そのような志向性の相違が生じる要因を特定するのは難しいが、後述のように、タイにおける宗教研究（タイ国内の宗教研究）の意義づけのあり方も1つの要因と言えよう。また日本側の要因としては、日本の経済力というものも関係しているだろう。現在の日本では、大学院生の研究者でも他国における長期滞在型の調査が行なえる機会は少なくない。個々人で研究費を捻出する研究者もいるだろうが、科研費や経済界系の財団による研究費支援を得ている者も多く、加えて為替レートの関係上アジア諸国での調査・滞在の費用は欧米諸国でのそれよりも抑えられる。

あるいは、戦後の日本に対するアメリカの政治・軍事・学問戦略の影響も考えられる。政治学者のベネディクト・アンダーソンは、第二次大戦後の政治・軍事的な必要性からアメリカで東南アジア研究が急増した事、とりわけ政治学（現地の政治エリートの研究）と人類学（反乱の可能性を持

つ農村や少数民族の研究)への支援がなされた事、そのため人文学系の研究への関心が弱かった事を指摘している [アンダーソン 2009: 60, 83-85]。日本の東南アジア研究(宗教研究)は、学問の中心にあったアメリカのこういった特殊な重力場に引き込まれてきたのかもしれない。

ちなみに、タイ人研究者が他国の宗教(とりわけ欧米や日本などの宗教研究)を研究する場合には、為替格差もあり長期の現地調査は難しくなる。実際、タイ人研究者の日本宗教研究は、これまで禅宗の思想研究 [タウィーワット 1987]、道元や親鸞の思想研究 [スワンナー 1991、プラトゥム 2010]、もしくはタイ国内の創価学会 [Pratoom 1993] などがテーマとされてきた。ただし、経済的・政治的な要因だけでは、日本の宗教研究の志向性を十分には説明できない。なぜなら欧米のタイ仏教研究においては、少なくとも現代タイの著名な僧侶の思想に関する研究は重視されてきたからである。

次に、このようなタイの地元の宗教研究者(タイ人研究者)の研究状況がよく理解されていないという問題、あるいは彼らによってどのような研究がなされているのかという問いについて、やや異なる視点からアプローチしてみたい。それは、先に述べたタイの宗教研究に関するタイと日本の志向性の違いが、単に思想かフィールドかといった対象の違いにとどまらず(しかしそれとの関連はある)、研究の持つ社会的意義の相違にまで及んでいるのではないかといった問いである。

日本の宗教研究者がタイ人研究者の議論へ配慮を欠いてしまうとしても、それは単に学問的対等性の問題だけではなく、また研究対象の(流行りの)相違ということにもとどまらない。むしろどこか根本的に議論が噛み合わない感覚に関係があるのである。そしてそれは、双方の目的意識の相違(偏り)に起因する問題のように思われる。ネイティブ人類学の問題を提起した桑山の言葉を借りれば、「日本人とはまったく文化的背景の異

なる外国の読者／聴衆に向かって、外国語で日本文化について語るということは、日本人と日本語で日本について語るのと、根本的に意味が違う」[桑山 2008: 68] といったことに起因する相違である。

例えば、筆者が日本の宗教状況や研究上の概念や論点をタイで紹介しても、あまり興味を持たれず（筆者の言語能力の不足を差し引いたとしても）、もっぱら日本の仏教はどうなっているのかという点ばかりが問われる。その時に感じるのが、宗教研究の目的意識の相違である。これについては、筆者が経験した具体的な事例から説明するのがわかりやすいだろう。

まず1つめの事例は、筆者が博士課程の時期に取り組んでいた、タイのタンマガーイ寺院（カリスマ的な僧侶として信奉される住職・神秘体験を伴う独特な瞑想・巨大で特異な宗教施設・規律と美を重視した組織とその広報などを特徴とし、都市新中間層を中心に広まっていった新興の大規模仏教集団）の研究視点についての相違である。

この仏教集団は、日本では新宗教的なものとしてとらえられており筆者もその文脈を博士論文（後に書籍として出版 [矢野 2006]）に組み込んだ。しかしこの点は、タイで研究指導をいただいていた先生にとっては意味の理解しにくいものであった。タイでは新宗教という言葉の意味自体が分かりにくい。ましてや日本で用いられる仏教系新宗教の在家主義などは腑に落ちない概念である。なぜ出家者ではいけないのか、そもそも日本仏教の僧侶は出家者と言えるのかといった基本的な点からして、在家主義の意味が理解しにくい⁽¹⁰⁾。

他方タイでは、タンマガーイ寺院を語る（批判する）際に重視されたのが、欲望を煽る消費主義的な仏教という視点である。仏教のあるべき姿という規範性をもとにした視点である。そこで筆者は博士論文（書籍）で、こういった現地の文脈も考慮し消費主義批判の視点をタンマガーイ寺院の活動の分析に組み込んだ。

その後、拙著はありがたくも日本宗教学会の2006年度学会賞に選ばれたのであるが、その際の論評には以下のようなことが記されていた。

「ただし、本書はいまだ検討すべき研究課題を抱えている。まず、本書における議論の厚みに比べて、導き出された結論がやや平板なものになっている点に不満が残る。著者は瞑想・修養系の信仰を消費社会論的な視座からとらえようとするあまり、その思想や信仰の深みを規律性と快適性という行為の表現様式へと平板化し、そのために、その思想や信仰の分析が皮相的なものとなっているきらいがある。」[日本宗教学会ウェブサイト、2006年度学会賞選考委員会報告]

この論評が拙著の議論を見誤っているとはいいたいわけではない。実際、分析が皮相的なのは筆者の力不足によるものである。ただ、その要因が「消費社会論的な視座からとらえようとするあまり」と書かれている点に注目したい。消費社会論からの視座は宗教研究としてはあまり適切ではないともとれるような文章である。もちろんそのように読める筆者の書き方が問題なのである。つまり、日本の宗教研究の志向性と、タイの宗教研究の志向性との間にある大きなずれを、拙著は十分に橋渡しできなかったということであろう。

もう1つ事例を挙げておこう。これは20年ほど前に筆者がタイのチュラーロンコーン大学留学時に、院生向けの英語によるタイ仏教のクラス（仏教学の授業ではなく、タイを知るための授業の1つ）に参加していた時のことであった。このクラスに参加していたのはタイ人学生（3名）と外国人学生（日本人、シンガポール人、アメリカ人の総勢5名程度だったと記憶している）であり、その日の授業では各自が口頭発表のテーマと概要を述べることになっていた。

まず初めにタイ人学生がテーマと概要を発表したのであるが、3名とも護教論的なテーマ（例えば、タイの僧侶が戒律を守るための支援や工夫、正しい教え・実践を伝える方法など）であった。当時、高名な僧侶による

複数の少女への性暴力事件などが社会問題になっていた影響もあったのかもしれないが、筆者は、こういった研究テーマは信仰者のな肩入れがありすぎ、かつ文化ナショナリズムを感じさせ、おまけに画一的で個性に欠けるものばかりだと感じた。

しかしその後の外国人達の口頭発表を聞いたとき、そういった理解が一面的なものであるということを感じることになった。なぜなら、外国人たち（もちろん筆者も含む）の研究テーマは、ほとんどが仏教と精霊信仰ないしは仏教のシンクレティズムといったものであり、これはこれで判を押ししたように画一的だったからである。タイ人の紋切り型とは異なるが、外国人研究者にも研究対象や研究の社会的意義に関する一定の見えない枠組みが存在しているように思えたのである。むろんこれは、単なる偶然にすぎないかもしれない。ただ、本稿の主題となるタイの中心的な宗教研究者に関する調査においても、思想研究の割合が高く、また精霊信仰や仏教のシンクレティズムなどを主たる研究テーマに挙げている者はほとんどいないという点は、見えない枠組みがある事の傍証にならないだろうか。

こういった問題を背景に、筆者は本稿で述べている調査研究の必要性を感じたというわけである。

なお現在筆者は、こういった研究の志向性の違いの一部は、世俗性（世俗主義・世俗化）の強い社会と弱い社会の違いの中で、社会的に構築された言説としての学問的知識体系の偏りに起因するものではないかと考えている。本調査研究の展望として、最後にこの点について述べておきたい。

4、調査研究の展望 世俗性の弱い社会における宗教研究とは

タイ人の研究にみられる思想研究重視や規範的な研究重視の志向性と、日本人によるタイの宗教研究の志向性との違いと相互無関心といった論点は（第3節の議論）、単にタイの文化ナショナリズムや内向きの研究と

いった点、ましてや研究様式の遅れという視点だけから簡単に説明できる問題ではないだろう。むしろこの論点は、タイにおける宗教学の不在や世俗主義・政教分離論の少なさ（第2節の議論）といった文脈に位置づけて考える必要があると思われる。つまりタイの宗教研究の志向性は、世俗性（世俗主義・世俗化）の弱い社会といった文脈において意味のある営みなのではないかということである。そしてそのような考察は、日本のような世俗性の強い社会における宗教研究を逆照射し、日本の宗教研究があまり自覚化することのなかった事象を前景化させるだろう。

例えば、宗教なるものを公的・普遍的文明・民族のカテゴリーとみなすタイ社会は〔矢野 2017〕、宗教的帰属が明示化されやすく、また自己の帰属する宗教についての研究が多くなり、他宗教への言及が難しくなるといった現象が生じうる。

タイでは、宗教を私的な実践・信仰とみなし、とりわけ個人的体験を重視するタイプの宗教研究（それは近代の西洋に生まれた宗教研究の1つの特性でもある）はあまり多くない。むしろ宗教は公的な特質を持ち、自身の宗教帰属を日常の宗教行事、学校での宗教教育、身分証明書の宗教記載欄などにおいて、明示化されるものとなっている。無宗教を標榜する人は極めて少ないので、ほとんどすべての人が何らかの（民族のカテゴリーとも関わる）宗教的帰属意識を持ち、意識的か無意識的かの違いはあれ、それを外部社会に示している。

言うまでもなく、出家者である仏教僧は風貌から仏教僧であることがわかってしまう。現代日本仏教の僧侶のように一時的に法衣や簡易袈裟を着脱し、一般人と僧侶を行き来できるような切り替えは考えられない（この切り替えにタイ人には驚き落胆するもするだろう）。タイの第2の宗教人口を持つムスリムの場合には、服装等がやはり帰属を外に明示する作用を持つ事がままある。また僧侶の場合は、呼称もタイ語名からパーリ語を用いた出家者名に変わるので、氏名（執筆名）から僧侶であることはすぐに

わかる。在家仏教徒の場合は、その人が仏教徒かどうかは判別しにくい。しかしムスリムについては、おそらく80%程度は氏名からムスリムであることが推測でき、タイの人口の約95%が仏教徒なので、間接的にはあるが、氏名から仏教徒であることがある程度は推測できる。

このように自分の宗教帰属が外部社会に明確になってしまう場合、自分の帰属とは異なる他宗教について調査を行ったり論じたりすることのハードルが高くなる。日本のケースにたとえて言えば、「天理教」と記された法被を着ながら霊友会の調査をするような奇妙さ、あるいは曹洞宗寺院の住職の肩書で他宗派や新宗教を正面から論じることの危うさがあるというわけである。加えて上座仏教の僧侶や在家仏教徒がイスラームについてフィールド調査を行なうのは（あるいはその逆の方も）抵抗感があるだろうし、僧侶や在家仏教徒が精霊信仰や仏教とのシンクレティズムを取り上げる際にも、批判への対応を踏まえた工夫が必要になるだろう⁽¹¹⁾。もちろん自身の帰属する宗教とは異なる他宗教の研究が、タイでなされていないという訳ではない。しかしそれが行ないにくい環境はあると思われる。

逆に宗教が私化した現代日本では無宗教者が多く、研究者の宗教的所属も明示的ではなく、他宗教の調査や論評執筆も比較的行ないやすく、学術的な書籍や論考も読者層として特定の信仰を持つ人を想定しないことが多い社会である。また宗教学の研究では、自分の関わる信仰とは異なる対象（異なる宗教、同じ信仰の中の異なる集団、異なる時代、異なる地域など）を選ぶように指導されることも少なくない。

現代タイ社会はそのような社会ではない。諸宗教にニュートラルに接近できるという状況は（日本もそれほどニュートラルではないかもしれないが）、タイでは限られている。

例えば、仏教学について言えば、タイ人がパーリ三蔵や古代インドの宗教について研究するということは、自身の文化から隔絶した遠い地域の過

去を学ぶといったものではない。欧米や日本（の仏教界）とは異なり、タイ社会にとって、古代インドの仏教研究は、「宗学」であり、今現在の社会との規範的つながりを意識した知の営みになるのである。

宗教に関する研究も全般的に、自分の帰属する宗教の研究が中心となり、語る対象も無宗教者を想定せず、時に護教的に、あるいは批判的な視点からの規範的な思想研究となったり、もしくは宗教間対話についての規範的な研究になったりするのではないだろうか。

この点をさらに敷衍すると、日本人によるタイの宗教研究が、日本人の視点からはニュートラルな研究としてなされているとしても、タイの宗教研究の空間に位置づけられた場合に、図らずとも規範的効果を帯びてしまうという事も考えられる。例えば、石井米雄のタイ仏教・政治論（サンガ・国王・正法の連関、サンガ法から語るタイ仏教についての議論）は（その英訳本は）[石井 1975]、タイにおける仏教の位置づけを正しくととらえているとして、タイでも高い評価を得ている。しかし、タイの政教関係に批判的な立場の研究者や多様な解釈の可能性を主張する研究者からすれば、石井の議論は事実を捉えた正しさを持つに留まらず、タイ政府の政治宗教的理念とその制度化のありかたを上書きしたという意味での正しさを持ち、その理念と制度を固定化する規範的機能を持つと見なされる可能性もあるだろう。

石井のタイ仏教・政治論が長年にわたり1つのモデルとして説得力を持っているのは、その研究の質の高さによるだけではなく、タイ政府がその体制を維持し、宗教を公的に捉える制度空間を支えている強さにも起因していると言えよう。したがって、もし石井のタイ仏教・政治論を乗り越えようと試みるならば、その試みをタイ人が行なうのであれ日本人が行なうのであれ、それはもはや世俗社会における純粋に学問上の理論的問題としての試みではなく、世俗主義・世俗化の弱い社会における学問の宗教・政治性に関わる試みとなる⁽¹²⁾。

とりわけ戦前・戦後の政治と宗教の入り組んだ問題を経験してきた日本社会で研究を行なう者、しかもタイの宗教を研究する者にとっては、この問題は自国の問題と接続して考えるべき点もあるように思える。

本稿では、タイにおける宗教研究の歴史と現状に関する調査研究の中間報告を行ない、その目的と背景、さらに今後の展望について論じた。

また、タイにおける宗教研究の状況が日本であまり知られていない事や、その背景にタイと日本の宗教研究の置かれた学問的周辺性の影響がある事、タイの宗教に対して、タイでは人文系の思想研究が多く、日本では社会科学系の研究が多い事を指摘した。

さらに世俗性（世俗主義と世俗化）の弱いタイ社会の特性が、自己の宗教に対する規範的研究の重視につながり、西洋的な宗教学を成立させにくくさせている点などを明らかにし、この点がまた日本のタイ宗教研究とのずれを生み出していると指摘した。そしてこのようなタイと日本の研究状況のずれなどを踏まえ、両者を切り結ぶことが、日本の宗教や宗教研究のあまり意識されない前提を前景化させることにつながることを論じた。

言うまでもなく宗教研究は、その国・地域の宗教（およびそのイメージ・概念）、政教関係、宗教と社会の関係、学問の位置づけなどと密接に関わってくる。またタイのように日本や欧米とは異なる宗教研究が展開されている国・地域は、決して少なくないだろう。加えて自身の関わる学問状況や社会状況を理解するためにも、本稿が提示した視点は有用ではないだろうか。

注

- (1) 本稿は、駒澤大学の在外研究（研究期間：2017年4月1日から2018年3月31日、滞在先：タイ王国マヒドン大学宗教研究学部、研究テーマ「タイにおける宗教研究の歴史と現在」）における研究成果の一部であり、また科研費の基盤研究B・16H05712 および基盤研究A・

16H01895 の助成を受けたものでもある。

- (2) 日本インドネシア学会は1969年に設立 [日本インドネシア学会ウェブサイト]、日本マレーシア学会は1992年に設立 [日本マレーシア学会ウェブサイト]、日本タイ学会は1999年に設立 (前身となるタイセミナーは1990年に発足) [北原 2001 : pp. i - ii]。ちなみに東南アジア各国の研究者が集まる東南アジア学会 (旧称 : 東南アジア史学会) は、1966年に設立され、2006年に現在の名称に改称した [東南アジア学会ウェブサイト]
- (3) アメリカの東南アジア研究と軍事戦略との関係については、ベネディクト・アンダーソンが触れている [アンダーソン 2009 : 60-90]
- (4) 例えば、近年の日本タイ学会では、タイから著名なタイ人研究者が参加する研究大会も行われている [日本タイ学会ウェブサイト、日本タイ学会2018年度研究大会プログラム]。
- (5) その理由は本研究の注目点が、学術全般ではなく、学術が社会にどうコミットし、そして社会が学術をどう形作ってきたのかにあるためである。タイ在住のタイ人以外の研究者は、タイ社会へのコミットの仕方が、タイ人とは異なる面を持つと考えられる。
- (6) 会員数は不明だが、2016年の学術大会は2日間で30名弱の発表者がエントリーしていた。
- (7) この件は、タイの宗教と政治についての研究を行なっているケンブリッジ大学の Dr. Tomas Larsson から伺い、自身で確認したものである。
- (8) ただし近年の日本宗教研究のケースでは、そのような問題は少なくなってきたと思える。
- (9) 政治学、社会学、人類学などではタイ人研究者と日本人研究者の交流なども進みつつあり、その一部に宗教研究の視点の共有なども見られる。また仏教学については世界の仏教学の主要研究者紹介の書籍が刊行されており [Somparn 2000]、研究文脈や成果を相互参照するための土台作りもなされている。
- (10) この問題は聖職者集団や聖職者の地位を持たないイスラームにも当てはまるもので、イスラームの新宗教を在家主義といった点からとら

えることはできない [Obuse 2017: 251]。在家主義という用語が、日本の宗教研究において隠してしまったもの・問われずにいるものがあるのではないか。

- (11) この点は、日本の伝統仏教系大学や宗門系研究機関で、仏教に関わる憑霊現象や霊能者の研究が微妙な扱いになる事と似ている。
- (12) 国家主導の仏教の画一化の在り方に対し、民衆の多様な仏教実践に注目するという研究が人類学等を中心に行なわれている。ただしそれは、国家主導の仏教を批判的に捉える契機として十分に機能していないように思える。国家の画一的な仏教やその制度からはみ出す事象がどれだけ多様で豊かであっても、その多様性は地域的慣行や不適切な事例、思想性を欠いたものとして、処理されてしまいがちである。ましてや政治的に後押しされ理想化したモデルにこういった多様性が組み込まれることもあまりない。

参考文献

- アンダーソン, ベネディクト 2009 加藤剛訳『ヤシガラ碗の外へ』NTT出版。
- 石井米雄 1975『上座部仏教の政治社会学 — 国教の構造』創文社。
- ウィチャック・パーニット 2015『交錯する国家と仏法』マティチョン出版会(タイ語文献)。
- (Vichak Panich 2558 *Rat-Tham-Nua*, Samnakphim Matichon)
- 北原淳 2001「創刊号によせて」『年報 タイ研究』日本タイ学会 i – ii。
- 桑山敬己 2008『ネイティブの人類学と民俗学 — 知の世界システムと日本』弘文堂。
- スラポット・タウィーサック 2018『国家管理から自由な仏教へ』サヤームパリタット出版会(タイ語文献)。
- (Surapot Thaveesuk 2561 *Chak Phutthasasana haeng Rat su Phutthasasana thi pen Isara chak Rat*, Samnakphim Sayamparithat)
- スワンナー・サターアナン 1991『禅の哲学 — 道元思想の研究』サヤーム(タイ語文献)。
- (Suwanna Satha-Anand 2534 *Phumipannya Wicha Zen: Botwikroe*

Khamson khong Phromachan Dogen, Sayam)

タイ哲学宗教学会ウェブサイト

<http://www.parst.or.th/th/> (閲覧日2018年10月20日) (タイ語文献)。

タウィーワット・プンタリクウィワット 1987 『日本社会と禅』 タンマサパー (タイ語文献)。

(Tavivat Puntarigvivat 2530 *Zen Sangkhom Yipun*, Thammasapha)

タウィーワット・プンタリクウィワット 2001 『従属理論と解放の神学』 ウィティータット財団事務所 (タイ語文献)。

(Tavivat Puntarigvivat 2544 *Trisadi Phungpha lae Thewawitaya haeng Kanplodploi*, Samnakgan Mulanithiwithithat)

チャーンナロン・ブンヌン 2004 「現代タイサンガの問題を解決するために」 スワンナー・サターアナン編 『東洋哲学の再構築』 チュラーロンコーン大学出版会 1-78 (タイ語文献)。

(Channarong Boonnoon 2547 “Honhang su Kankaepanha khong Khanasongthai Pachuban” Suwanna Satha-Anand bannathikan, *Khamriangmairu Sang Prachaya Tawanok*, Samnakphim haeng Chulalongkorn Mahawithayalai, 1-78)

東南アジア学会ウェブサイト

<http://www.jsseas.org/> 東南アジア学会の現況 / (閲覧日2018年10月20日)。

日本インドネシア学会ウェブサイト

http://nihon-indonesia-gakkai.org/?page_id=378 (閲覧日2018年10月20日)。

日本宗教学会「2006年度学会賞選考委員会報告」

<http://jpars.org/prize/award/award2006> (閲覧日2018年10月20日)。

日本タイ学会ウェブサイト、日本タイ学会2018年度研究大会プログラム

<http://jsts.moo.jp/thaigakkai/wp-content/uploads/JSTS-Convention2018.pdf> (閲覧日2018年10月20日)。

日本マレーシア学会ウェブサイト

<http://jams92.org/> (閲覧日2018年10月20日)。

プラトゥム・アンクーンローヒット 2010 『菩薩の請願 — 親鸞思想に関

- する議論』チュラーロンコーン大学印刷所（タイ語文献）。
- (Pratoom Angurarohita 2553 *Phramahapranithan khong Phraphothisat: Khotoyaeng thang Prachaya khong Shinran*, Rongphim haeng Chulalongkorn Mahawithayalai)
- 矢野秀武 2006『現代タイにおける仏教運動 — タンマガーイ式瞑想とタイ社会の変容』東信堂。
- 矢野秀武 2017『国家と上座仏教 — タイにおける政教関係』北海道大学出版会。
- Obuse Kieko 2017 "The Japan Islamic Congress: A Possible Case of an Islamic New Religion in Japan." *Journal of Religion in Japan*, Brill, 6: 241-263.
- Pratoom Angurarohita 1993 *Soka Gakkai in Thailand: A Sociological Study of Its Emergence, World View, Recruitment Process, and Growth*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania, University Microfilms.
- Somparn Promta 2000 "Buddhist Studies in Thailand" Donald K. Swearer and Somparn Promta eds. *The State of Buddhist Studies in The World 1972-1997*, Center of Buddhist Studies, Chulalongkorn University, Chulalongkorn University Printing House, Bangkok, Thailand, 1-32.
- Suwanna Satha-Anand 2013 "Madsī and Mahapajapati as Great Women in the Buddhist Tradition", Supakwadee Amatayakul ed. *The emergence and Heritage of Asian Women Intellectuals: A Celebration of the 150th Birth Anniversary of Queen Srisavarindira*, recognized as one of the World's Eminent Personalities by UNESCO, 27-42.

Abstract

What kind of religious studies have been conducted in Thailand as a less secular society?

Hidetake YANO

This paper has two purposes: first, to offer a tentative report on my research investigating the “history and present situation of religious studies in Thailand” and second, to examine a methodological aspect of the purpose, background, and objectives of the research. This study’s most immediate objective is to select leading Thai scholars of religious studies and investigate the content of their research. Furthermore, the study aims to collect and publicize basic information on religious studies in Thailand on one hand and to clarify the relation between state, religion, and religious studies in Thailand on the other. This investigation is driven by two lines of enquiry. One is to contribute to a greater understanding of the characteristics of religion and religious studies in Thailand, which places less importance on “secularism” and is a less “secularized” society. The second is to identify the differences between the intentionality of religious studies in Thailand and other countries, especially Japan. This paper also suggests that a case study of Thailand may illuminate unconscious aspects of religious studies in Japan which is a more secular society.